HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	漆黒の夜空が放つ光：“The Diamond as Big as the Ritz”における眩いDisillusion
著者	松浦，和宏; MATSUURA，Kazuhiro
引用	北海学園大学学園論集(189・190): 73-85
発行日	2023-03-27

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

漆黒の夜空が放つ光：“The Diamond as Big as the Ritz”における眩い Disillusion

松　浦　和　宏

はじめに

F. Scott Fitzgerald（1896–1940）研究で著名な Matthew J. Bruccoli は，“The Diamond as Big as the Ritz”（1922）を「最上のファンタジー作品」（161），「マスターピース」（109）と極めて高く評価している。しかしながら，この物語の読者や批評家からの評価は高いとは言い難い。Fitzgerald は多くの時間を執筆と修正に割いたものの，この物語を引き受ける出版社はなかなか見つからなかった。その理由は，当時のアメリカ社会を席巻していた経済的成功への憧憬を，この物語が否定していると読者に捉われたからだという（Bruccoli 156）。また，同様の理由で他の批評家からの注目も高いとは言えない。Fitzgerald の作品にしては珍しく，社会性の高さがその理由となっている。この作品を考察する先行研究の少なさもまた，この作品に対する従来の評価を象徴している。

“The Diamond as Big as the Ritz”は，アメリカ西部に住む世界一の金持ち一族を軸に展開される。アメリカ建国の父と同じ Washington の名を冠する一族が，鉱山から半ば無限に生み出されるダイヤモンドを背景に世界一の金持ちとして君臨している。そのダイヤの量は，世界中のありとあらゆる貴金属を合計した価値をも凌駕している。しかしながら，この一家の眩い栄光は暗い歴史によって支えられている。役人の買収，大規模な偽装，秘密を知ってしまった人間の暗殺を含むあらゆる工作活動によって，この一族が所有するダイヤモンドの存在は誰にも知られていない。しかし，物語の終盤に黄金目当ての飛行機乗りたちが飛来することで，事態は一変する。モンタナの奥地に佇む希少貴金属仕立ての巨城の中で，豪華絢爛な品々と奴隷たちに囲まれ，世俗から完全に隔離された空間で展開されるこの短編作品は，この眩い世界を文字通り根底から物理的に支えていた巨大なダイヤモンドの大爆発と焼失で終焉を迎える。

既述の通り，この作品について，カネや富の膨張を追い求める当時のアメリカ社会に向けられた Fitzgerald の批判や風刺的な視線であると，これまでは評価されてきた。しかし，そのような社会悪に対する告発といった画一的な構造に，この物語を単純に押し込んでいいのだろうか。本論の主張は，それとは異なるものである。つまり，現実世界から遠くかけ離れているように見え

るこのファンタジー作品には，社会や資本主義に対する一義的な批判や失望や怒りを表明するだけではなく，それを超える枠組みを読者に提示し，相反するものを包摂する姿勢が描かれているのである。それは，“double vision”と呼ばれるFitzgeraldの技法が土台となっている。

富や格差に対するFitzgeraldの主張が，恣意的に作品中に混入していると言いたいのではない。そうではなく，富や信仰に対する価値観が大きく揺れ動く戦後，そして戦間期のアメリカ社会の中で，富を巡る思索と作品の創作は相互的な関係にあった。そして，アメリカン・ドリームというファンタジーを失った社会に向けて，失望の中にこそ未来への希望の萌芽があるということをこの物語は提示しようとしている。アメリカ社会において，新世代を象徴するこの作家が社会の動揺をどのように見つめ，そしてその不安定な状況下で立脚点をどこに求めていたのかを，本論は考察する。

1．変容するアメリカと消えゆくアメリカン・ドリーム

この物語が描かれた当時，アメリカ社会は大きな変化を迎えようとしていた。この作家自身もそれを感じ，作品に投影している。時代の寵児としてもてはやされることとなる新人作家F. Scott Fitzgeraldは，デビュー作である *This Side of Paradise*（1920）の中で当時のアメリカを以下のように捉えている。

> As an endless dream it went on: the spirit of the past brooding over a new generation, the chosen youth from the muddled, unchastened world, still fed romantically on the mistakes and half-forgotten dreams of dead statesmen and poets. Here was a new generation, shouting the old cries, learning the old creeds, through a reverie of long days and nights; destined finally to go out into that dirty grey turmoil to follow love and pride; a new generation dedicated more than the last to the fear of poverty and the worship of success; grown up to find all Gods dead, all wars fought, all faiths in man shaken.（260）

This Side of Paradise の主人公であり，Fitzgeraldの生写しでもあるAmory Blaine自身が象徴するように，そして，この作品が新しい世代に熱狂的に歓迎されたように，信仰や世界の存在に対して，従来の古い世代とは異なる考え方を持った新しい世代が戦間期のアメリカに突如現れたことで，大きな変動や変革が社会全体を揺さぶっていた。新旧の価値観の狭間で，大きな震撼をこの作家は感じ取っていた。

Fitzgeraldが目撃していた社会的変動は，当時のアメリカ社会全体の動きとも一致している。歴史家のJennifer Ratner-Rosenhagenは，1920年代のアメリカ社会の特徴を以下のように総括している。

> In the years after World War Ⅰ, national and international economic and social developments pushed and pulled Americans in different, sometimes opposing, directions. On the one side were the forces of modernization - new scientific theories, new technologies for the home, and new ideas about family and sexuality - all making new ways of thinking, living, and loving possible. On the other side was the pull of tradition - religious revivals, the familiarity of one's hometown in a period of migration and urbanization, and old fears and animosities - tugging at many American's minds and hearts.（117）

新旧の価値観が衝突しながら進む先には，極めて大きな変容が待ち構えていた（118）。この Rosenhagen の指摘は，*This Side of Paradise* の描写とも正確に付合する[1]。

そのような社会的動揺の中で描かれた“The Diamond as Big as the Ritz”は，当時の雑誌の編集者たちから富やカネに対する風刺として受け止められ否定的に捉えられた。究極の栄華を誇り，その経済的な支配力を背景に力をふるう Braddock Washington とその家族の最期はあまりにも唐突に，そして呆気なく到来する。金銀を散りばめた巨城は無惨にも粉々になり，全ての財産も焼き尽くされる。この結末が資本主義に対する冒涜と受け取られ，結果的に“The Diamond as Big as the Ritz”を買い取ってくれる雑誌はなかなか見つからなかった（Bruccoli 160）。このように当時はアメリカ社会が信奉する経済的な成長や資本の力を揶揄するかのような物語は，出版社や編集者から冷淡な扱いを受けたのである[2]。編集者の複数回に渡る指示に渋々従い，文字数を大幅に減らすなどして Smart Set からの出版に漕ぎ着けたものの，Fitzgerald が自信を持って送り出したこの物語に付いた値段は 300 ドルであった。Fitzgerald はこの物語の執筆に並々ならぬ意欲を持って取り組んでいただけに，この評価には心底失望したようだ（Bruccoli 161）。これは，Fitzgerald の他の短編作品と比較しても著しく低い値付けだった（Mangum 64）。時は 1922 年，アメリカ社会は前代未聞のバブル的活況に足を踏み入れようとしていた。好景気の最中で，その核心部分である成長や富に対する風刺が読者から受け入れられるはずもなかったことを象徴している。

---

[1] 揺れ動く世界の中で，唯一安定して拡大するものがあった。それは，資本主義，つまり経済的成長への信仰である。そんな中で作者の頭の中を占める関心は，当然ながら富の所有に向かった。Ronald Berman も指摘するように，カネの主題が“The Diamond as Big as the Ritz”以降の Fitzgerald を占有し続けることになる（91）。そして，社会に偏在する富の恒久的な差も，当然ながら社会における階級の差異として作品の中に投影されている（80）。このように，この作家の創作と富のテーマは，固く結びついている。

[2] この作品を通して，Fitzgerald は富に対する信仰を意図的に「冒涜」しようとしたのだろうか。エージェントの Harold Ober に送った手紙に“I think that 'Benjamin Button,' though, like 'The Diamond in the Sky,' satirical, would sell, because it does not 'blaspheme' like the latter”（*A Life in Letters* 54）と書いていることから，Fitzgerald 自身，“The Diamond as Big as the Ritz”に多少なりとも意図的に風刺的要素を組み込んでいたが，それが冒涜的であると解釈されるとは予想していなかった。つまり，富やカネについての「信仰」を全面的に否定するつもりはない，とも解釈できる。

当時の読者や編集者からの受け止め方同様，これまでの批評を紐解けば，この作品の主題がカネや富に対してFitzgeraldから向けられた批判的視線であるという点で一致する。しかし，それは特定の金持ちや個々人の浪費と言ったミクロな問題ではなく，アメリカ社会全体に向けられた問題意識だった。例えばDavid S. Brownが指摘するように，資本主義の拡張を盲目的に追求し，その“soul”を失いかけているアメリカ社会全体への批判として受け止められている（104–5）[3]。その批判は，具体的にはどこに向けられていたのか。Brownによれば，アメリカの精神的根幹である自由や民主主義を人々が蔑ろにし，“self-interests and capitalist aggrandizement”（106）のみを追求する1920年代のアメリカ社会こそが，Fitzgeraldによる批判の対象だったという[4]。しかしながら，永遠に続くかの如く思われた経済的成長は，幻でしかなかった。大恐慌の到来によって，その幻想は1929年に何の前触れもなく瓦解し，長く続く暗い時代が到来する。社会に蔓延していた経済的な成長や成功に対する憧憬は，大恐慌によって姿を消していった。

このような背景に即して考えれば，この物語の根幹にあるのは，幻想の消失が招いた失望のようにも見える。同様の指摘をする批評も存在する。例えば，Alice Hall Petryが“The Diamond as Big as the Ritz”を夢とカネを失うことでもたらされる“disillusion”の物語と定義することにも頷ける（70）。主人公のJohn Ungerは，実際に物語の最後に“There are only diamonds in the whole world, diamonds and perhaps the shabby gift of disillusion. Well, I have that last and I will make the usual nothing of it”（216）と“disillusion”に陥っているのである。この“disillusion”の対極にあるもの，それはillusionである。そしてアメリカ社会におけるillusionとは，富やカネで大成を遂げ，成功を収めること，栄華を極めることと言える。それはつまり，アメリカン・ドリームの実現とも換言できる。Marius Bewleyによれば，“The Diamond as Big as the Ritz”は，「Fitzgeraldのアメリカン・ドリームに対する姿勢を最も顕著に表現している物語だ」という（261）[5]。そして，この物語を通して表明されているのは，アメリカン・ドリームに対する批判だという（265）。絶対的な富や成功を象徴するダイヤモンドの山が爆発し消滅することは，夢からの目覚めを意味しており（259），主人公のJohnが物語の最後に“disillusion”に陥るのは，アメリカン・ドリームという

[3] Fitzgerald作品と当時の社会の関係性を軸に考察するBrian Wayも，他の批評同様，“The Diamond as Big as the Ritz”が当時の社会に蔓延っていた浪費などを描いた作品であると指摘する（2）。Fitzgeraldは作品を通してそのような現象だけではなく，当時のアメリカ社会そのものを包括的に捉えようとしていた。

[4] アメリカ社会を包括する富やカネと，その地続きの問題としての階級の差は，その更なる地平線上により大きな，アメリカに潜在する問題として現前化する。John T. Irwinは，Fitzgerald作品中の対立が最終的に到達するのは，南北間の対立であると指摘する（28）。南北の対立が，カネや欲望と人間性や血統を巡る対立を通して描かれる。この対立構造は，本論が主張するように資本主義やカネと夢といった枠内で展開される“The Diamond as Big as the Ritz”でもメタ的に反芻されている。

[5] Lawrence Buellも同様の指摘をしている。他のどの作品よりも，“The Diamond as Big as the Ritz”がFitzgeraldによるアメリカン・ドリームに対する最も明確な“critique”であるとの指摘を付している（30）。

illusion や夢は実際には存在しないという真実に気付いてしまったからなのだという（269）[6]。

しかしながら，Bewley の指摘やここまで見てきたような当時の Fitzgerald と“The Diamond as Big as the Ritz”を併置すると，両者の間に矛盾が横たわっていることに気が付く。その矛盾とは，幻想（アメリカン・ドリーム）を追い求めるアメリカ社会を批判的に眺めていた Fitzgerald が，それと同時に“The Diamond as Big as the Ritz”の中では，幻想を失ってしまったことに対する“disillusion”を描いていると指摘されていることである。次章では，Fitzgerald の一見矛盾のように見えるこの姿勢を，この短編小説の形態と Fitzgerald の作家的な姿勢をもとに考察していきたい。

2．Double Vision とファンタジー

この物語が描こうとしたファンタジーとは，戦間期アメリカ社会における成功，すなわちアメリカン・ドリームのことであり，Fitzgerald がそのような社会に批判的であったことを，前セクションで確認した。ではなぜ，Fitzgerald はこの物語を描く際に，ファンタジーという形態，それも実在するアメリカ西部の地域にそびえ立つダイアモンドの山という，現実と仮想世界の境界線が曖昧な空間を敢えて採用したのか。これまでの批評においても，“The Diamond as Big as the Ritz”はファンタジー作品として認識されてきた。先に触れている Bruccoli，そして Lawrence Buell も“The Diamond as Big as the Ritz”や“The Curious Case of Benjamin Button”（1922）をファンタジー作品として認識すると同時に，その形式をなぜ Fitzgerald が採用したのかを精査する必要があると指摘する（23）。Henry Dan Piper も“The Diamond as Big as the Ritz”を「ちょっと風変わりなファンタジー」（77）かつ“authentic American fairy tale”（78）にカテゴライズしている。しかしながら，実は Fitzgerald 作品の中にファンタジーは少ない。例えば，同時期に描かれ，相似的な主題である富や資本主義に照準を合わせた短編“May Day”（1920）には，ファンタジー的な要素が含まれていないことから，“The Diamond as Big as the Ritz”の特異性がより一層際立つ。つまり，Fitzgerald が敢えてこの作品をファンタジーという形態で描いた必然性は，ここからは見えてこない。では逆に，先にも言及したように，この物語がファンタジーとして持つ曖昧さに着目してみてはどうだろうか。

曖昧さという点に着目した上でこの物語の主題の一つである富を眺めてみれば，同様の傾向を見出せる。“The Diamond as Big as the Ritz”では，富に対する一方的な批判や恭順の姿勢は見られない。むしろ，相反する要素が入り混じっている。主人公の John は，命からがら脱出した直後，ダイヤモンドの山が消滅するのを目撃し，安堵するというより富の消失に“disillusion”を感じ

[6] この物語のテーマが，アメリカン・ドリームという illusion の消失であるという批評は数多く存在する。例えば Rose Adrienne Gallo も同様の指摘をしている（85）。虚構を追い求めることが，アメリカン・ドリームであるという。であるならば，John が味わった“disillusion”は，アメリカン・ドリームを掴み損ね，富を得られなかったことへの失望を意味する。

つつも，未来へ向けて前向きに歩き出そうとしている。両極端な物事を取り込んでいるこのような姿勢は，“The Diamond as Big as the Ritz”に限定された傾向ではない。John Kuehl が指摘しているように，相対するものの両方を取り込むことで生じる曖昧さは，他の作品においても確認できる。例えば同時期に描かれた“The Ice Palace”（1920）ではアメリカ南部について，そして“May Day”（1920）ではマルクス主義に対する作者の曖昧さが，作品上に表出しているという（45）。作家の Dos Passos は Fitzgerald のこの特徴を“a combination of intimacy and detachment”（159）と表現し，Fitzgerald と Princeton 大学で同期だった批評家の Edmund Wilson はそれを次のように説明する：For, like the Irish, he is romantic, but is also cynical about romantic; he is ecstatic and bitter; lyrical and sharp. He is bound to represent himself as a playboy, yet he mocks incessantly at the playboy (81)。Fitzgerald の死後，Fitzgerald のこの傾向を Malcolm Cowley は“double vision”と呼び，この作家の根底をなす重要な概念であると指摘する。

> He cultivated a sort of double vision. He was continually trying to present the glitter of life in the Princeton eating clubs, on the Riviera, on the North Shore of Long Island, and in the Hollywood studios; he surrounded his characters with a mist of admiration and simultaneously he drove the mist away. (149)

この傾向が最も顕著に表れているのが，Fitzgerald のエッセイ“The Crack-Up”（1936）の一文である。

> The test of a first-rate intelligence is the ability to hold two opposed ideas in the mind at the same time, and still retain the ability to function. One should, for example, be able to see that. Things are hopeless and yet be determined to make them otherwise. This philosophy fitted on to my early adult life, when I saw the improbable, the implausible, often the ‘impossible,’ come true. Life was something you dominated if you were any good. Life yielded easily to intelligence and effort, or to what proportion could be mustered of both. (69)

上記のエッセイや Cowley の指摘をもとに“double vision”を説明するならば，対立する物事を併置できる能力と言える。そして，その均衡が取れた状態の中から，物事の本質を捉える能力と定義できるだろう。それは文字通り対象となるものを「賞賛の霧で包むと同時に，その霧を剥ぎ取ろうとする」行為であり，一見物事や状況が「不可能」で「絶望的」な状況であっても，その中に希望を見出す姿勢，とも言い換えることができる。この作家的姿勢は，当然ながら“The Diamond as Big as the Ritz”にも底流している。例えば Suzanne del Gizzo は，Fitzgerald はカネや消費に関する物語の最高の書き手であると同時に，彼自身がこのテーマに対して「複雑な気持

ち」を抱いていたと指摘している（34）。その上で，*The Great Gatsby*（1925）や“The Diamond as Big as the Ritz”に見られる過度な消費や煌びやかな生活は，Fitzgerald にとって背徳的な行為や消費文化そのものであったと指摘する（52）。であるならば，ダイヤモンドの山と城が吹き飛んだことで，主人公の John が“disillusion”を感じたのはなぜか。この城やダイヤモンドこそが，モラルに反すると感じていた消費主義の象徴だったはずである。そもそも，John は経済的な豊かさを崇拝する人物として描かれているのである。

> This simple piety prevalent in Hades has the. earnest worship of and respect for riches as the first article of its creed - had John felt otherwise than radiantly humble before them, his parents would have turned away in horror at the blasphemy.（186）

背徳感を誘発する輝きが地上から消え去った今，John は彼の心を引きつけていた消費主義や拝金主義から救済された安堵感に満たされるのではなく，“disillusion”を感じている。これも，“double vision”の一環として描かれている[7]。

ここまでみてきた曖昧さは，両義性という形でも物語に登場している。Bruccoli は，この物語が示す両義性に注目する（*Some Sort of Epic Grandeur* 156）。富にその所有者が所有されるという逆転現象を例として挙げている（157）。すなわち，相反する要素を内包するこの作家の“dualism”がここでも示されている。この一族の秘密を知ってしまった John を，Braddock Washington は暗殺しようとする。危機の瀬戸際に追い込まれ，幸運にも侵入者の飛来によって危機的な状況から脱出し安堵しながら，その反面，John はまだその夢，つまりアメリカン・ドリームから醒めたくない，またその夢の中に返り咲きたいと考えている。ここでもまた，曖昧な態度が表出している。これまでも Buell によって“The Diamond as Big as the Ritz”に両義性の主題が伏流していることが指摘されている。

> Fitzgerald continues to show John as a compound of cliché and precocious remarks he half-understands. The speed with which he then falls asleep is disconcerting - and maybe also pathetic: perhaps he would like to return to his dream.（33）

Buell の指摘は大変示唆的である。John や Kismine たちの仕草やリアリティの欠如などは，まるで現実と夢の境界線上にいるかのような様子が全てを物語っている。物語に描かれる奇妙な二重性と曖昧性は，彼の“double vision”を最も顕著に現前化させいる。これを Buell は見逃していない。

---

[7] また，Jennifer Banach はアメリカン・ドリームの実現を通して物質的なものだけではなく，精神的な欲求を満たしたいという“dualism”を Fitzgerald 作品の中に見出している（30）。

> Altogether, "Diamond" admirably realizes what for Fitzgerald was perhaps the most significant potential of the fantastic mode: its ability to convey at the same time that dreams of a metamorphosed reality are emotional and social necessities which we cannot help but indulge, and that they are in another sense insubstantial, ludicrous, pathetic. In this respect fantasy was well suited to mirror Fitzgerald's complex attitude toward his times ("It was an age of miracles, it was an age of art, it was an age of excess, and it was an age of satire") and to measure up to his famous "test of a first-rate intelligence" - namely "the ability to hold two opposed ideas in the mind at the same time, and still retain the ability to function." (34)

ダイヤモンドの消滅と共にJohnに生じる失望とは，illusionが光り輝くものへの憧憬である限り，結局のところ，幻想として抱いていたアメリカン・ドリームが消えてしまったことへの失望に他ならない。そしてその失望とは，Fitzgeraldの風刺，つまりは，社会への反対意識の表明ということになる。このように富に対する反対という批評に異議を唱えようとするBuellの議論は本論にとっても有用ではあるが，しかしながら，これまでの批評と同様に"The Diamond as Big as the Ritz"をアメリカ社会への批判と捉えるBuellの議論には同意できない。これから指摘するように，本論はむしろ，Fitzgeraldが描写する富やカネは，この作家が提示する"double vision"によって，一方向に偏った視座から距離を置こうとしていると主張するのである。

3．両極端の一致

この物語を俯瞰すれば，相反する要素，両極端の要素の一致が数多く見られる。そもそも，なぜJohnがダイヤモンドの城に招待されたのだろうか。それは，アメリカ東海岸にある名門学校の歴代の生徒で，彼が最も貧しかったからではないか。物語の中で殊更強調されるように，これまでもこの先も生徒の中で彼だけが高級車を用いずに学校に到着している。

> St. Midas' School is half an hour from Boston in a Rolls-Pierce motorcar. The actual distance will never be known, for no one, except John T. Unger, had ever arrived there save in a Rolls-Pierce and probably no one ever will again. St. Midas' is the most exclusive boy's preparatory school in the world. (183)

Johnをモンタナに招待したPercy Washingtonは世界で一番の金持ちであり，この二人は両極端な組み合わせになっている。また，ダイヤモンドの城の場所自体も極めて曖昧かつ両義的な存在として描かれている。そこは，アメリカ合衆国に内包されてはいるが，アメリカ合衆国的ではないエリアである。Percyの祖父や父親の工作により，彼らの敷地はアメリカ合衆国の地図上には存在しない（187)。さらに，この一族自体が，"His one care must be the protection of his secret,

lest in the possible panic attendant on its discovery he should be reduced with all the property-holders in the world to utter poverty”（195）というように一歩間違えれば大富豪から貧民に転落する，両極端の状況と常に背中合わせの中で存立している。ダイヤモンドの秘密が暴露されれば，その膨大な埋蔵量ゆえにこの鉱物の希少性が大幅に希薄化し，結局ただの石と等価となる。それは，世界一の金持ちが無一文に瞬時に転落することを意味する。さらに Kismine が暴露する考え方も，同じく両極端の併存である：Then she added in a sort of childish delight: “We'll be poor, won't we? Like people in books. And I'll be an orphan and utterly free. Free and poor! What fun!” She stopped and raised her lips to him in a delighted kiss（209）。Kismine にとって，自由と貧乏は同時に成立するものとして認識されている。それはもちろん，John が“It's impossible to be both together,” said John grimly. “People have found that out. And I should choose to be free as preferable of the two”（209）と指摘するように，本来ならば徹頭徹尾相反するものなのである。

このストーリー自体がリアリティのない夢，まさに illusion なのだが，この物語全体が夢と現実，意識と無意識の境界線を意図的に曖昧にしている。それは，“‘His was a great sin who first invented consciousness. Let us lose it for a few hours.’ So wrapping himself in his blanket he fell off to sleep”（216）というように不意に眠りに陥り，あるいは不意に目覚める主人公や，物語の最終行に突如として登場する無意識への言及によって顕現されている。先に見た通り，この作品の形態，社会全体が共有するファンタジー（アメリカン・ドリーム）を描いた作品に通底するように，物語における境界線自体が極めて曖昧模糊に描かれているのである。このように，この物語中の存在や世界自体が，両極端な要素の組み合わせによって，絶妙のバランスを保ちながら成立している。

そして，同じく異なるものの組み合わせで成立しているのが，将来に対する夢である。

> He was enjoying himself as much as he was able. It is youth's felicity as well as its insufficiency that it can never live in the present, but must always be measuring up the day against its own radiantly imagined future - flowers and gold, girls and stars, they are only prefigurations and prophecies of that incomparable, unattainable young dream.（195）.

到来するかもしれない明るい未来，それこそがこの物語における夢なのだった。「美しい花，少女，ゴールドに星」，これらが明るい光を放てば放つほど，この少年を待つ夢は壮大になるはずである。そして，その明かりもまた，異なるものの組み合わせによって現れるものであり，作品世界の中で光り輝く将来や夢は，“Everybody's youth is a dream, a form of chemical madness”（216）と「化学反応的」な組み合わせによって成立するのである。

ダイヤモンドの城が轟音と共に弾け飛ぶ瞬間が明示するのは，この物語を徹底して貫徹する逆説性だ。黄金を求めて飛来した飛行士たちが迫り来る中，Braddock Washington，彼の妻，そし

て長男のPercyは山中に逃げ込む。その中でBraddockが最期に文字通り持ち金を賭けたのは，神への賄賂であった（211）。神に全てのダイヤモンドを捧げる代わりに，時間を過去に戻して欲しいと頼むのであった。しかし，その要請を神は却下する。神はその問い掛けに反応しようとせず，不在によって単に要請を却下するだけではなく，不在によってその存在を明らかにしつつ却下する。Braddockの賄賂を神が断った瞬間，陰からその様子を見ていたJohnは，神の存在をその不在から感じ取っている。

> Then, as John stared in giddy fascination, it seemed to him that a curious phenomenon took place somewhere around him. It was as though the sky had darkened for an instant, as though there had been a sudden murmur in a gust of wind, a sound of far-away trumpets, a sighing like the rustle of a great silken robe - for a time the whole of nature round about partook of this darkness; the birds' song ceased; the trees were still, and far over the mountain there was a mutter and dull, menacing thunder. That was all. The wind died along the tall grasses of the valley. The dawn and the sky resumed their place in a time, and the risen sun sent hot waves of yellow mist that made its path bright before it. The leaves laughed in the sun, and their laughter shook the trees until each bough was like a girl's school in fairyland. God had refused to accept the bribe. (213)

神の不在が示す神の存在こそが，まさにこの物語が持つ両義性や逆説性であるが，それをこのシーンが明示している。また，ダイヤモンドの城を壮大に爆発させたのは，既に見た「化学的」な反応だった。神への賄賂を拒絶され，自らの最期を覚悟したBraddockたちがJohnやKismineの目の前で向かったのは，ダイヤでできた山の地下だった。そこには，電熱線が張り巡らされているのであった。

> "Oh," she cried wildly, "where are they going? What are they going to do?"
> "It must be some underground way of escape —"
> A little scream from the two girls interrupted his sentence.
> "Don't you see?" sobbed Kismine hysterically.
> "The mountain is wired!" (214)

地下に持ち込んだダイヤモンドが触媒になり，山全体が誘爆される。ダイヤで構成される山そのものと自らを，Braddockは一瞬にして爆破したのだった。大爆発が発生した瞬間は，強烈な閃光と高熱が生じる。しかしここで思い出したいのは，この物語にとって，明かりが強烈になればなるほど，理想的なillusionや夢を指し示すはずである。しかし，爆発から発生した閃光や熱は

若さや夢や美しさを象徴するどころか，文字通り地獄のような断末魔だった。ここでもまた，この物語が持つ逆説性が発動しているのである。

この物語を支配する逆説性は，相反する物事の中間地点・境界線上で生じる。まさにそれに相応しい場面が，ダイヤモンドの城を脱出した直後に相応しい場面が現出する。その場所は，“At sunset John and his two companions reached the high cliff which had marked the boundaries of the Washington's dominion”（214）と言及されるような，夢物語であった Washington 一族の敷地と現実世界との境界線上なのである。そこで Kismine は，この物語の“disillusion”が何を意味するのか，その答えを読者に提示してくれる。彼らの世界は，逆説性に支配されている。それはつまり，善と悪，明と暗の逆転を意味する。そのハイライトは，Kismine がダイヤモンドだと思って持ち出してきた石を John に見せる場面で明確になる。彼女がポケットを裏返して見せたその塊は，ダイヤではなく，模造宝石“rhinestones”だったのである（215）。この瞬間，全てがポケットの中身とシンクロして文字通りひっくり返る。John と Kismine の貧乏な結婚生活が確定し，“They make me feel that it was all a dream, all my youth”（216）と Kismine が呟くように，彼らが見ていた夢と現実の境界線も確定する。そして，時を同じくしてあの世とこの世の境界線も引かれることになる。

> “Will father be there?” she asked. John turned to her in astonishment.
> “Your father is dead,” he replied somberly.
> “Why should he go to Hades?”
> You have it confused with another place that was abolished long ago.”（215）

ここで，全てが反転する最中で，“rhinestones”を見てすぐに John が感じた“disillusion”とは何なのか。それはもちろん，希望の光である。Johh が Kismine に“I don't know any longer. At any rate, let us love for a while, for a year or so, you and me”（216）と語りかけるように，この絶望的な状況で見出す，微かな光である。Kismine が持ち出したものが，模造宝石だったのはそのためだ。これがもし本物のダイヤモンドであったなら，偽の illusion やファンタジーが彼らの人生を支配し続けるだろう。偽物だったからこそ，その夢から醒めることができた。ファンタジーとしてのアメリカン・ドリームに批判的だったからこそ，その夢からの脱出を，“disillusion”を本物の希望の前触れとして，Fitzgerald は肯定的に描いたのだ[8]。

[8] ダイヤモンドの山と城が消滅し，この夢の国は終焉を迎える。それはつまり，ファンタジーの終焉を意味する。だからこそ，Buell が指摘しているように，物語全体を支配する特殊な時間は注目に値する。それまで推定される年齢は約 40 歳“about forty”で“robust”に見えていた Braddock Washington が，神への賄賂が却下された瞬間に“a broken, white-haired man”豹変している。ダイヤの巨城を取り囲んでいた特殊な時間は，このファンタジーが終焉すると同時に通常の時間に戻ったのだった（32）。

ここまで考察してきた作品の曖昧性や両義性に対して，異議を唱える批評も存在する。富への批判だけとは言えないFitzgeraldの姿勢を，William A. Faheyは批判する（144)。作品中の冗談やコミカルな描写によって，この作品の主題である富に対する批判が弱められてしまっているとFaheyは疑義を提出する。しかしながら，この批評こそ“The Diamond as Big as the Ritz”が“double vision”を体現していることの証左となる。ここまで本論が考察してきたように，この短編が単なる風刺や一方的な批判ではなく，それすらも内包する物語であるがゆえに，Faheyが指摘するような印象を読者に与えるのは必然かもしれない。しかしながら，これこそがFitzgeraldによる“double vision”の効能なのだ。この批評が逆説的に照らし出すのは，“The Diamond as Big as the Ritz”が相反するものたちの境界線上に存在しているということだ。

おわりに

Johnにとっての illusionと夢は，ダイヤモンドの消滅によって失われた。しかし，彼の眼前には新たな展望が拓かれている。それは，全体を照らし出すように光り輝いていた幻（アメリカン・ドリーム）の痕跡に虚無の闇を残すのではなく，新たな夢や希望の光を灯す存在を見出すこと，そしてそのような光の照射を受けて，失望から解放される術なのだ。それはまさに，煌めく光が全て消え去ったことでKismineが星空を見上げた時のセリフとも重なる。

> “What a dream it was,” Kismine sighed, gazing up at the stars.
> “How strange it seems to be here with one dress and a penniless fiancé!”
> “Under the stars,” she repeated.
> “I never noticed the stars before. I always thought of them as great big diamonds that belonged to some one. Now they frighten me.” (216)

Washington一族が所有していたダイヤモンドは全て失われ，Johnの夢も霧散した。しかし，その消失が引き金となり光が失われ暗闇に包まれたことで，逆説的にダイヤモンドと同じ光を宿したものが暗い夜空に存在していることにKismineは生まれてはじめて気が付く。この夜空で光り輝くものは，ダイヤモンが放つそれとは異なり，誰にでも常に等しく明かりを与え続けるのである。“The Diamond as Big as the Ritz”は，社会に対する風刺や批判を表明する作品という枠組みを超越し，Fitzgeraldの“double vision”を通して，大きな変化を目の前に混沌とする社会において，暗闇（“disillusion”）の中に潜む希望の光を逆照射しようとする作品だったのである。

Works Cited

Banach, Jennifer. “F. Scott Fitzgerald’s American Dream.” *Critical Insights F. Scott Fitzgerald*. Ed. Don Noble. Pasadena: Salem P, 2010. 19–33.

Berman, Ronald. “*The Great Gatsby* and the Twenties.” *The Cambridge Companion to F. Scott Fitzgerald*. Ed. Ruth Prigozy. Cambridge: Cambridge UP, 2002. 79–94.

Bewley, Marius. “Scott Fitzgerald and the Collapse of the American Dream.” *The Eccentric Design: Form in the Classic American Novel*. New York: Columbia UP, 1963. 259–69.

Brown, David S. *Paradise Lost: A Life of F. Scott Fitzgerald*. Cambridge: Belknap P of Harvard UP, 2017.

Bruccoli, Matthew J. *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald*. Columbia: U of South Carolina P, 1981.

———. *As Ever, Scott Fitz-: Letters Between F. Scott Fitzgerald and His Literary Agent Harold Ober 1919-1940*. Ed. Matthew J. Bruccoli and Jennifer McCabe Atkinson. New York: Olympic Marketing Corp, 1972.

———. *A Life in Letters*. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Scribner, 1994.

Buell, Lawrence. “The Significance of Fantasy in Fitzgerald’s Short Fiction.” *The Short Stories of F. Scott. Fitzgerald*. Madison: U of Wisconsin P, 1982. 23–38.

Cowley, Malcolm. “Third Act and Epilogue.” *F. Scott Fitzgerald: The Man and His Work*. Ed. Alfred Kazin. New. York: Collier Books, 1951. 147–54.

Dos Passos, John. “A Note on Fitzgerald.” *F. Scott Fitzgerald: The Man and His Work*. Ed. Alfred Kazin. New York: Collier Books, 1951. 155–60.

Fahey, William A. *F. Scott Fitzgerald and the American Dream*. New York: Thomas Y. Crowell Company, 1973.

Fitzgerald, F Scott. *This Side of Paradise*. 1922. Ed. James L. W. West III. New York: Cambridge UP, 2012.

———. “The Diamond as Big as the Ritz.” *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: A New Collection*. 1922. Ed. Matthew. J. Bruccoli. New York: Scribner, 1989. 182–216.

———. “The Crack-Up.” *The Crack-Up*. Ed. Edmund Wilson. New York: NDP, 2009. 69–84.

Gallo, Rose Adrienne. *F. Scott Fitzgerald*. New York: Frederick Unger P, 1984.

Gizzo, Suzanne del. “Within and Without: F. Scott Fitzgerald and American Consumer Culture.” *Critical Insights F. Scott Fitzgerald*. Ed. Don Noble. Pasadena: Salem P, 2010. 34–54.

Irwin, John T. *F. Scott Fitzgerald’s Fiction*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2014.

Kuehl, John. *F. Scott Fitzgerald: A Study of the Short Fiction*. Boston: Twayne Publishers, 1991.

Mangum, Bryant. “The short stories of F. Scott Fitzgerald.” *The Cambridge Companion to F. Scott Fitzgerald*. Ed. Ruth Prigozy. Cambridge: Cambridge UP, 2002. 57–78.

Petry, Alice Hall. *Fitzgerald’s Craft of Short Fiction: The Collected Stories 1920-1935*. London: UMI Research P, 1989.

Piper, Henry, Dan. *F. Scott Fitzgerald: A Critical Portrait*. Holt, Rinehart & Winston, New York: 1965.

Ratner-Rosenhagen, Jennifer. *The Ideas that Made. America: A Brief History*. Oxford UP, New York: 2019.

Way, Brian. *F. Scott Fitzgerald and the Art of Social Fiction*. New York: St. Martin’s Press, 1980.

Wilson, Edmund. “Fitzgerald before *The Great Gatsby*.” *F. Scott Fitzgerald: The Man and His Work*. Ed. Alfred Kazin. New York: Collier Books, 1951. 78–88.